女装看護婦監禁治療

二角レンチ

体験版

R－18

看護婦さんのスカートの中

目次

お母さんの下着でオナニー 3
原作利用権について 13
プリンタでの印刷方法 15
奥付 16

お母さんの下着でオナニー

僕は女の下着が大好きだ。

特に年上の、大人の女性が穿いているパンツが好きだ。同じ学校の女の子なんてまだまだ女として熟していない。女は少なくても二十歳を過ぎていないといけない。だから学校の女の子の下着には興味がない。

外を歩いていると二十代から三十代の女性ばかり目に行く。座っていたり階段を上っていたりするのを見るとパンチラしないかとつい見てしまう。

もちろんのぞき込んだりはできない。そんなことをして捕まったら大変だ。

生のパンツを見たり、触ったりしたい。女の人のパンツを穿いたりブラをつけたりしながらオナニーしたい。

もう本やビデオで見るだけのオナニーじゃ満足できない。

本物のパンツでオナニーしたい。それもできれば脱ぎたてで。

僕の欲望は日に日に増していった。思春期の性欲はとても強い。毎日二回も三回もオナニーしてしまう。

その青く強い性欲が、大人の女性下着に強い興味があれば容易に解消できない。

もう限界だ。ずっと我慢していたけれどもうやらずにはいられない。

お母さんの下着でオナニーしよう。

僕は母子家庭だ。お父さんは数年前に消えた。どこへ行ったのか知らない。お母さんははっきりとは言わないが、どうも女を作って逃げたらしい。

お母さんはとても美人で、しっかりしていて、優しかった。ただ一つ、すごく真面目すぎるところがあった。融通が利かない。何でも真面目に考えすぎる。

お母さんのことは尊敬している。いいお母さんだ。仕事が大変なのに育児もおろそかにしなかった。だから毎日夜遅くまでお母さんが仕事で帰ってこなくても僕はひねくれずに育った。

そんな立派で尊敬できるお母さんを、汚してはいけないと思っていた。
だからずっと我慢していた。お母さんはとても美人だ。小さい頃は男の子なら誰でもそうであるように、お母さんと将来結婚したいと思っていた。
今は現実を知っている。そんなことは思っていない。お母さんを女として見たり欲情したりはしない。
でも下着は別だ。大人の女性の下着。僕はとても興味を引かれる。なぜ生身の女や学校の女の子でなく年上の、それも下着に興味を持つのだろうか。
わからない。いや、わかる気がする。
お母さんへの尊敬と愛情が、でもお母さんへは向けられない。家族は性欲の対象にならない。だから小さい頃に見たお母さんの下着姿がそのまま僕のあこがれであり、性欲の対象となった。
お母さんではなく、大人の女性。それを象徴する下着。だから下着に性欲が向いたのかもしれない。
まあこういうのはいくら考えてもしかたない。はっきりわかるものでもないし、原因なんてどうでもいい。
今大事なのは、僕は大人の女性下着でオナニーしたくてたまらないということだ。
もう我慢できない。ずっと汚すまいと思ってお母さんの下着を使うことを我慢していた。もしばれたらお母さんは泣くだろう。真面目すぎるお母さんのことだ。息子が自分の下着でオナニーするなんて理解できないし受け流せないだろう。
ばれたらおしまいだ。でも。
お母さんは仕事が忙しい。休みも週に一日しかない。朝から晩まで働いている。
朝早くに起きて朝食とお弁当の用意をする。洗濯も掃除もする。
夜は八時や九時に帰ってくる。それから夕食の支度をする。
僕も家事を手伝う。でもお母さんは僕がしっかり寝て学業に専念できるように、あまりまかせたがらない。
そんな大変なお母さんに迷惑はかけられない。だからずっと我慢してきた。

しかしもう限界だ。お母さんは歳のわりに美人だ。性欲の対象ではない。家族を対象にしてはいけない。
でも美人のつけていた下着なら。家族かどうか関係ない。美人の女性が穿いていたパンツやつけていたブラを身につけてオナニーしたい。したくてたまらない。
他から入手するあてなんてない。でもお母さんのならいつでも手に入る。
洗濯したあとのじゃ駄目だ。汚してしまうわけにはいかないし、なにより洗濯前の汗と匂いとそれ以外のものまで染み込んだ下着がいいのだ。
いくら想像してオナニーしてもすっきりしない。本物に触りたい。匂いを嗅ぎたい。身につけて、上から触ってオナニーしたい。
ごめん、お母さん。
僕は今日ついに、お母さんの下着でオナニーすることにした。

お母さんはいつも仕事でくたくただ。夕食を食べてお風呂に入ったらすぐ寝てしまう。
お母さんが寝てからしばらくたった。もう熟睡しているに違いない。
僕はふすまをそっと開けた。
お母さん、寝ている。
この狭いアパートで、僕の部屋は奥にあった。ふすまを隔てた居間に布団を敷いてお母さんが寝ている。
僕の部屋からはお母さんが寝ている居間を通らないと廊下に出られない。僕はお母さんの横をそっと通り抜けた。
仕事と家事で疲れきったお母さん。ちょっとやそっとじゃ起きないだろう。
僕のために頑張ってくれているお母さん。そんな敬愛するお母さんを今から汚すのかと思うと心がずきりと痛む。
でもしょうがないじゃないか。僕だって我慢してきた。ずっと我慢してきたんだ。
それでも我慢できないほどの性欲。大人の女性下着に対する性欲。脱ぎたてパンツを穿いてオナニーしたい。ブラをつけて胸をもみたい。

とうとうそれを実現するかと思うともうギンギンに勃起していた。
洗面所へ忍び込む。そして洗濯物のかごを漁る。
お母さんの下着が入っていた。風呂に入ったらお母さんはすぐに寝る。完全に寝静まるまで待っていたが、それでもほんの二時間前に脱いだものだ。
ホカホカとはいかないが、脱ぎたてパンツ。
それを手に取るとすごくドキドキした。心臓が痛いくらい脈打つ。
「これを、今から、穿いて」
僕はパンツとブラをそっとふところに入れた。
またそっと戻る。母の寝顔を見ると一瞬ためらう。でも自分の部屋へ戻りふすまを閉めるともうためらう気持ちは消えていた。
ふところからブラとパンツを出す。それを布団に並べて見る。
うっすらとピンク色の下着。部屋は暗いが真っ暗というほどではない。近くで見ればちゃんと見える。
汗が出てきた。興奮して身体が火照る。僕は服を脱いだ。
下着も脱ぐ。全裸になると、ペニスは待ちきれなくて全快で勃起する。
お腹につきそうにそそり勃つ。普段オナニーするときよりも大きくなっている気がする。
パンツを手に取る。それを鼻に当てて匂いを嗅ぐ。
酸っぱい。でも甘い女の匂いがする。
お母さんの匂い。はあ。
僕、ついに、女の下着でオナニーするんだ。
これはお母さんのじゃない。大人の女性が穿いていたものだ。
そう思えば罪悪感が薄れる。オナニーに集中できる。
もうたまらない。僕は鼻にパンツをあてがいその芳醇な香りを嗅ぎながら片手でティッシュとゴミ箱を布団のそばへ持ってきた。
ティッシュを数枚しゅっしゅと取る。射精するときすぐに使えるように用意しておく。
準備ができて、ペニスがガチガチにいきり勃つ。僕はペニスを握りしめる。
いつもと違う。いつものオナニーよりはるかに硬い。
それに太い。ペニスは興奮するほど血が多く集まり、より硬くより大きく勃起する。

すごい。こんなにも興奮しているんだ。
竿を握ってペニスをしごきはじめる。口に当てたパンツの香りを胸一杯に吸い込む。
いい匂いだ。たまらない。
幸せを感じる。今までのオナニーとはまるで違う幸せがある。
僕はやっぱり女性の下着が大好きだ。どうしてここまで好きなんだろう。童貞なのに、女の人の身体よりも下着に興味があるなんて。
布団の上で、ひざ立ちのまま背筋を伸ばしてオナニーする。全裸なのに暑くて汗が出る。
「ふ、ふう。ふん、ん」
鼻を鳴らして匂いを嗅ぐ。甘く湿った匂い。酸っぱく臭い匂い。最高だ。女の人のあらゆる匂いが染み込んでいる。それを鼻に当てて思い切り嗅ぐ。その至福はどんなおいしそうな料理の匂いを嗅ぐのもかなわない。
「ん、ん、ふ、ふうう」
夢中でペニスをしごく。今までのオナニーとは快感が違う。もう射精しそうだ。ペニスをぐいぐいしごきたてる。
しゅっしゅっとしごく音が静寂の部屋に響き渡る。ふすまの向こうへ聞こえはしないだろうが、音がやけに大きく聞こえる。
お母さんが隣で寝ている。息子が自分の下着でオナニーしているのに気づかず熟睡している。
興奮する。もう限界だ。
「ふ、ん、んん、んんんん、は」
腰を大きく突き出し強くしごく。快感が一気に高まる。すごい勢いでこみあげてくる。
このまま出したい、でも汚してしまう。
ぐっと力をこめてこらえる。ペニスから手を離しさっき取っておいたティッシュの束を手に取る。
「ん、ん、やばい、やばい」
漏らしそう。あわてて亀頭にティッシュをあてがう。
間一髪間に合った。力をこめてもおさえきれないたかぶりが爆発した。
「んん、んん、んん、んうううううう」
ティッシュで包んで亀頭を握りしめ、どくどくどふどふ射精した。

「んあああ、気持ちいい、うわ、これ」
　快感のあまり思わずつぶやいてしまう。パンツで口を塞いでいられない。耐えられないほどの快感。オナニーとは思えないほどの絶頂。
　手の中に熱がこもる。熱が伝わる。ティッシュの中にマグマがとき放たれる。
「うわ、あ、たくさん、出る」
　耐えきれずうずくまる。パンツを落とし、両手でペニスを押さえ背を丸める。
　まだ出てる。すごい快感が長い時間味わえる。今までのオナニーはなんだったんだ。こんな気持ちいいことがあったのか。
　セックスしたこともない。フェラチオしてもらったこともない。女の子とエッチをしたこともないし触ったこともない。
　でもこれは、きっとセックスよりも気持ちいい。
　エッチを知らないからか、これ以上の快感は無いように思えた。
　ようやく射精が終わった。すごかった。気持ちよかった。最高だった。
　何枚も重ねたティッシュがぐっちょり濡れていた。染み込んで、手までべったり汚れていた。
　ゴミ箱に入れる。さらにティッシュを取って手を拭く。ペニスも拭く。
「すごかったあ。はああ。気持ちよかったああ」
　ぼそぼそとつぶやく。口に出さずにはいられない。となりで寝ているお母さんに聞こえないくらい小声で、でも言葉に出すことに興奮を覚える。
　匂いを嗅ぐだけでこれだけ気持ちいいのだ。穿いて触ったらどれほど気持ちいいのだろう。
　考えるだけでペニスが硬くなった。あんなに大量に射精したのに、休まなくても出来そうだった。
　全身から汗をかいている。運動したかのように息が上がっている。身体が火照っている。
　布団に置いていたブラを手に取る。
　ひもに腕を通して胸に当てる。背中に手を回してホックをつけようとする。

なんとかつけられそうだ。届かなかったらどうしようと思っていたけれど、大丈夫そうだ。
でもつけるのは以外と難しかった。僕は座ってペニスを勃起させたまま、何十秒も背中のホックと格闘した。
なんとかつけられた。結構難しいなこれ。
パンツを手に取る。ごくりとのどを鳴らす。いよいよ穿くんだ。女のパンツ。
布団に寝転がる。足を上げてパンツに通す。
するするとパンツを上げていく。足にこすれる布はやわらかくてなめらかだ。その感触だけでペニスがびくびく跳ねる。
パンツをぐいっとのばす。股間にくいこむ。そのままのばして反り返ったペニスの先までかぶせる。
手を離す。やった。ついにやったんだ。
女のパンツを僕が穿いている。女のブラを僕がつけている。
ペニスがギンギンになる。さっき射精したばかりなのに、射精前より大きくなっている。
薄い布が引きちぎれそうなくらいのびている。勃起ペニスに引っ張られ、股間に食い込む。包み込んだ玉がとても窮屈に押さえつけられる。
このやわらかい布で押さえつけられる感触。最高だ。
ブラを触ってみる。お母さんの胸はとても大きい。胸の無い僕がその上から触ってもブラがへこむだけ。しかたなくブラの下に手を差し込む。
乳首がすでに尖っていた。すごい。乳首いじるのははじめてだけど、こんなに硬く勃起するんだ。
指をのばして指先でパンツをなでる。パンツの上から勃起ペニスをなでる。
「はあ、あ」
痺れるような快感があった。
ビデオで見た女のオナニーは、パンツの上からなでていた。真似してみたら、電気のような快感があった。
「なんだか、いつものオナニーと違う」
竿を握ってしごくオナニーと快感の質が違う。甘く切ないもどかしさがある。

「けっこう、いいかも」
　僕は舌なめずりをすると、パンツの上から指先でなで回した。
「はあん、あん、ああああん」
　声が漏れてしまう。激しくしごくオナニーと違う。やさしくなでるオナニーがこんなに気持ちいいなんて。
　片手で乳首を、片手でペニスを責め立てる。女の下着をつけているせいか、女を触っているような気持ちになる。女に触られている気持ちになる。
「ん、はあ。これ。すごい」
　普段のオナニーとまるで違う。気持ちも快感もまるで違う。
「んあああああ。気持ちいいよおお」
　男のオナニーはペニスを握ってしごくだけ。それだけだと思っていた。でも違う。ビデオで見た女のオナニー。やさしくなでるオナニーがこんなに気持ちいいなんて。
「はあ。は。たまらないよお」
　うつ伏せになる。腰を振って勃起ペニスを布団にぐいぐい押しつける。
　お尻をなでる。パンツのなめらかな布が汗でしっとりはりついている。そのお尻をパンツの上からなで回す。
「ん、痴漢、されてるみたい」
　興奮する。すごい。女の下着をつけてオナニーすると女になった気がする。女がされるいやらしいことをされている気分になると興奮して快感が増す。
　腰を振って布団にこすりつける。ぐしゅぐしゅと音が鳴る。
「はあ、は。ああ。いい。いい」
　僕は激しく腰を振る。お尻をなで回しながら布団にこすりつけオナニーする。
　夢中だった。興奮しまくった。だんだん動きが激しくなり、あえぎ声が大きくなった。
　隣でお母さんが寝ていることも忘れて、オナニーに夢中になった。音を立て、あえぎながらオナニーしまくった。
「ん、ん、もう。もう」
　仰向けになる。布団でこすりまくってガチガチの限界ペニスをパンツの上から握りしめる。

「んは。はあ。あ。あ」
　ぎゅっぎゅとしごきたてる。やっぱり最後はこれだ。竿をしごいて思い切り射精する。
　パンツをかぶせてあるからティッシュをあてがわなくてもいい。このまま射精する。パンツの中に射精する。
「ん、ん、すごい、すごい、はあ。んぐ、あ、うあ」
　パンツの上からペニスをしごく。パンツの上から玉をもむ。両手で交互に玉とペニスを触りまくる。
「んあ、うわ、出る、出る」
　こみあげてきた。全力でしごきまくる。先走りで濡れたパンツがくちゅくちゅ音を立てる。
「ん、はあ、出る。女パンツに中出しする」
　こらえにこらえて快感が高まる。めまいがしそうなほど我慢して、とうとう漏らしてしまう。
「んあああ、はあああああああん」
　僕はペニスを強く握りしめながら射精した。
　背中が仰け反る。布団の上で腰を浮かせてエビ反る。
　身体を跳ねさせ悶えながら射精する。なんだこれ。快感が強すぎてじっとしていられない。
「んはあ、あはあ、ああん、うはあ」
　存分に射精する。二回目とは思えないほどたくさん出てくる。
　根本を握り、パンツを引っ張る。やわらかい布に圧迫されながら漏らす射精はものすごく気持ちいい。
「あ、ああ、これ、これえええ」
　左右に身をよじりながら悶えまくる。耐えられない気持ちよさだ。じっとしていられない。
　これに比べれば、普段のオナニーがいかに気持ちよくないかわかる。じっとして、声も出さずに耐えられる射精なんて快感が低すぎる。
　本当に気持ちいい射精をするとこうなるんだ。身悶え、あえぎまくる。汗が吹き出る。全身に快感が広がり翻弄される。
「あ、はあ。あは。はあ」
　長い射精が終わった。僕は精液まみれでグチョグチョのパンツごとペニスを握ってしごいていた。

もう一回できないかな。
さすがに無理かもしれない。でも射精して敏感なペニスをこうしてしごいているとまだ痺れる快感を味わえる。
ぐちゅぐちゅと音を立ててペニスをしごく。じんわりした快感を味わいながらさっきのすごすぎる快感を思い出す。
ふすまが開いた。
心臓が止まるかと思った。身体も脳も停止した。
お母さんが、立っていた。
え、え？
夢中になりすぎた。お母さんが隣で寝ていることをすっかり忘れていた。
うるさくし過ぎた。あれだけ動いて物音を立て、声を出してあえぎまくっていたのだ。
仕事で疲れ、泥のように熟睡しているお母さんが起きるなんてよっぽどだ。僕はいつのまにか、そんなに大きな声で悶え暴れていたのだ。
ばれた。どうしよう。
頭が回らない。動けない。手の中で急速にペニスが萎んでいく。全身の快感が冷たい氷に取って代わる。
どうしよう。言い訳が思いつかない。そもそも言い訳が通用するわけがない。
どうしていいかわからずただ混乱していた。泣きそうだ。どうしてこんなことに。
お母さんは僕をじっと見ていた。眉をひそめ、口を結び、険しい表情だった。
その顔が、くしゃりと歪んだ。大粒の涙をこぼしたかと思ったとたん、ひざをついて泣き崩れた。

原作利用権について

原作利用権は、アイデアを原作として利用することができる権利です。

原作として利用するというのは、このアイデアをもとにしてあなた自身のアイデアで改変し、あなたが用意した絵などの素材で作品を作ることです。

アイデア以外の絵などの素材を利用することはできません。

例外として文章はアイデアそのものを述べたものであるため、必要に応じて一部あるいは大部分を使用することが出来ます。そっくりそのまま使うのではなく、あなた自身のアイデアで改変して使用してください。

本作品に収録されているすべてのアイデアは原作利用権付きです。

本作品を購入した人は誰でもそれを原作として、自由に改変した上で自分の作品を作ることができます。

体験版など無料で提供したものには原作利用権は付いていません。

原作として使用する際に一切の連絡、許諾、契約はいりません。

原作として使用する際は、原作者名を記載してください。原作、原案、アイデア提供など呼称は何でもかまいません。
原作：二角レンチ

収録されている作品はすべてフィクションです。実在の人物、団体、事件等には一切関係ありません。

原作、原作者および他のあらゆる人、物、団体等に対して貶める、損害や迷惑を与えるなどの行為を禁止します。

原作として使用することにより生じる一切の問題や損失、賠償等に対し原作者は責任を負いません。

原作を使用する人は、すべて自己責任で使用してください。

原作者はその原作を用いて作られた作品に対し、利用規定に反しない限り一切関与しません。作品内容に口を出すこともなければ、その作品から得た利益に対し分け前を要求するようなこともありません。

この原作は公開されたものです。そのため、未発表の作品のみを募集する賞などには使えません。

この原作はすべて自分で考えたオリジナルですが、既存の作品と似ていないという保証はありません。アイデアというのは世界中の誰かが同じことを考えているものであり、完全に誰のアイデアとも似ていないアイデアというのは存在しないためです。

原作の著作権を放棄しているわけではありません。この原作を使用して作った作品の著作権はその作成者にありますが、原作の著作権は原作者にあります。

二角レンチが作成、販売している原作利用権付き作品を購入した方は、同時に二角レンチのブログ「ストックスタックストーリー：原作マガジン出張版」内の全ての作品についても原作利用権を有するものとします。

ストックスタックストーリー：原作マガジン出張版
http://stockstackstory.seesaa.net/

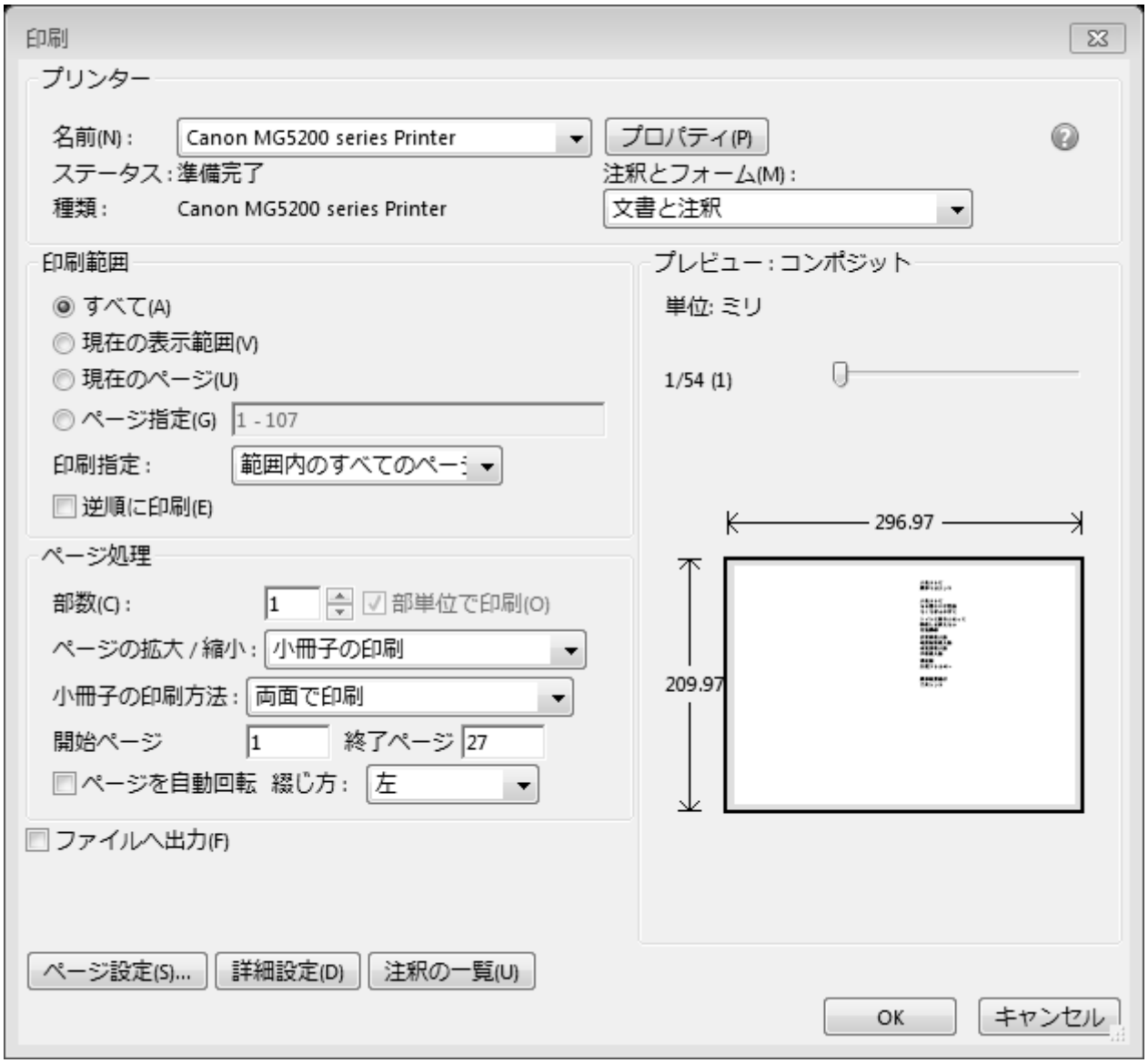
プリンタでの印刷方法

この PDF は印刷して読みやすいようにデザインされています。

１．Ａ４コピー用紙を用います。
２．印刷範囲で「すべて」または「ページ指定」をします。
３．「両面で印刷」「綴じ方：左」で「小冊子の印刷」をします。
４．両面印刷で一枚につき４ページが印刷されます。
５．中綴じ用ホチキスなどで綴じます。
６．二つ折りにすると完成です。

Ａ５サイズで手軽に読みやすい文字サイズになっています。

（注：お手持ちのプリンタがこれらの機能に対応している場合に限ります）



奥付

この内容を無断転載、複製して配布するなどの迷惑行為を禁止します。

この内容を閲覧、利用するなどして生じるあらゆる問題、損害等に関してこちらは一切の責任を持ちません。すべて自己責任で行ってください。

収録されている作品はすべてフィクションです。実在の人物、団体、事件等には一切関係ありません。

作品名
女装看護婦監禁治療　体験版

発行日
2011 年 11 月 10 日

著者
二角レンチ

ブログ・連絡先
http://originalmagazine.seesaa.net/